

教科書・地図帳の資料を活用し、 思考力・判断力・表現力等を育成する①

—世界の諸地域編—

元全国中学校社会科教育研究会会長 赤坂寅夫

その一 「地理的な見方・考え方」を働かせる資料の読み取り

このたび改訂された新学習指導要領では、各教科で「知識及び技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力・人間性等」の三つの柱に基づいた目標が明記され、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進が求められています。その際、深い学びにつながる各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせることが重要であると指摘されています。地理的分野の学習においては、「地理的な見方・考え方」を働かせて社会的事象をとらえ考えることが大切です。すなわち、写真、地図、統計・グラフ、文章等の資料から地理的事象を読み取り、位置や空間的な広がりに着目し関連性・関係性等を思考する学習活動が重要なのです。

「地理的な見方・考え方」の育成には地理的技能が重要であり、その育成の仕方についてはこれまでも「トラの巻」でたびたび示してきました。とくに『中学校社会科のしおり』2014年度1学期号～3学期号「トラの巻④～⑥」「地理的技能の基礎・基本①～③」で詳しく述べています。ぜひ参照してください。

ポイント①



思考力の育成には、資料の読み取りが重要

そこで今年度の「トラの巻」では、今使われている教科書や地図帳の資料を活用して思考

力・判断力・表現力等を育成する実践例を、3回の連載で示していきたいと思います。今回は、世界の諸地域から2つの例を示します。

その二 中心資料と中心発問の選択 〈ヨーロッパ州-EU統合の課題〉

一般的にヨーロッパ州の単元では、主題を「ヨーロッパの国々の結びつきとその変化」として地域的特色を理解し、EU統合の利点と課題を考えさせることをねらいとして授業者と生徒との一問一答による展開で学習を進めることが多いでしょう。ここでは生徒主体の思考活動とするため、中心資料を活用した中心発問を投げかけ、さらにそれに関連する資料を活用し生徒自身がEU統合の課題を見いだしていく事例を示します。中心発問とは、本時または単元のねらいを達成するための多様な見方・考え方を引き出す問いかけであり、中心資料とはその問いかけに活用する資料です。

○**中心資料**：『社会科 中学生の地理』（以下、教科書）p.61「⑥EU諸国における1か月あたりの最低賃金の比較」（図1）

○**中心発問**：「最低賃金が高い国々と低い国々はどのような国々か。その理由と背景を考えよう」

・Q（補助発問）：「最低賃金が最も安いブルガリアは最も高いルクセンブルクのおよそ何分の1の額か」

・Q（補助発問）：「最低賃金が高い国々と安い国々の位置を地図で確認しよう」

※Qは資料を読み取るための補助発問として示してもよい。

◇**関連資料**：『中学校社会科地図』（以下、地図）

帳) p.51 「②EUの加盟国」
→Q: 「EUはどのように拡大したのだろうか」

◇**関連資料**: 地図帳p.51 「③国による経済格差」(図2), 地図帳p.53 「①工業生産額」
→Q: 「工業のさかんな国はどこか」, Q: 「工業と国内総生産額との関連を考えよう」, Q: 「これらの図と教科書p.61『⑥EU諸国における1か月あたりの最低賃金の比較』とを照合してみよう」

◇**関連資料**: 地図帳p.53 「③労働者の移動」
→Q: 「労働者はどのような国からどのような国へと移動しているか」, Q: 「なぜ、労働者は移動するのか」

上記の関連資料を比較・関連・照合し、まずは個人で根拠となる資料を示しながら中心発問に対する解答を考えさせ、その結果をグループあるいは学級全体で発表します。

その後、学級全体で情報の共有と教科書p.61の本文での確認を行い、まとめとしましょう。

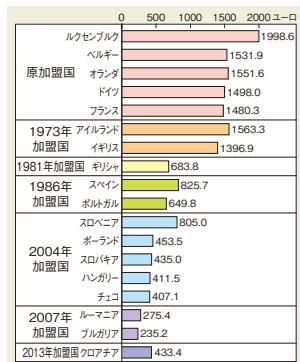


図1 『社会科 中学生の地理』 p.61 「⑥EU諸国における1か月あたりの最低賃金の比較」

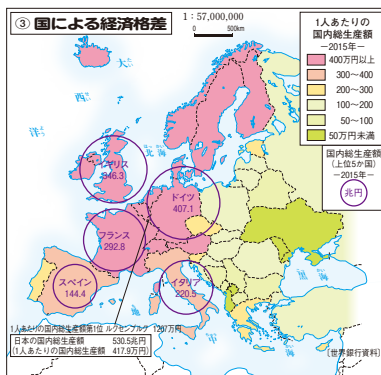


図2 『中学校社会科地図』 p.51 「③国による経済格差」

なお、資料を読み取って賃金や額、労働者の人数等を比較する際には、これまでの「トラの巻」で示したように日本のデータ等を提示して、それと比較しながらデータに実感をもたせることが大切です。

ポイント②

思考活動の中心となる資料と発問を選択し、それに関連する資料と発問を構成すること

その三 興味・関心を引く資料を中心資料として活用する思考活動〈南アメリカ州-環境問題-〉

ヨーロッパ州の事例では統計・グラフを中心資料として活用しました。加えて、生徒が「おや?」「これは何?」と興味・関心をもつ資料を中心資料として導入で活用し、追究意欲を継続させることも思考活動には重要です。

それでは、南アメリカ州における教科書の写真資料を中心資料として「アマゾン川流域の熱帯林の減少とその背景」を主題とした事例を示します。

○**中心資料**: 教科書p.96 「②アマゾン川流域で拡大する熱帯林の伐採」(図3)

○**中心発問**: 「魚の骨のように見える線は何か」, 「この現象(事象)はなぜ起きたのか。この現象はどのような影響を及ぼしているのか」
・Q(補助発問): 「中心から南北にのびる線の長さは何kmか」, 「なぜ、魚の骨のように奥にのびるのか」

※魚の骨のように見える線(フィッシュボーン)がアマゾン川流域の熱帯林の伐採によるものであることに気づかせ、伐採の状況の理解と伐採がブラジルの生活や経済に及ぼす影響について、以下の関連資料とそれに関する発問により思考活動を展開して考察します。

◇**関連資料**: 教科書p.96 「①熱帯林を切りひらいてつくられた製材所」

→Q: 「なぜ煙がたっているのか」, Q: 「木材は何に加工されているのか」, Q: 「熱帯林を切りひらいた地域は何に変わっているのか」

◇**関連資料**：教科書p.97 「③アマゾン川流域の開発地域」

→Q：「森林破壊の激しい地域を確認しよう」
Q：「森林木材は何に利用されているのか」
Q：「森林伐採された地域はどのように変化しているか」

◇**関連資料**：地図帳p.68 「⑨アマゾン盆地（ブラジル）の森林の減少」

→Q：「森林破壊の激しいところの大きさと同縮尺の北海道とを比較してみよう」

◇**関連資料**：教科書p.97 「④アマゾンの森林伐採面積の推移」

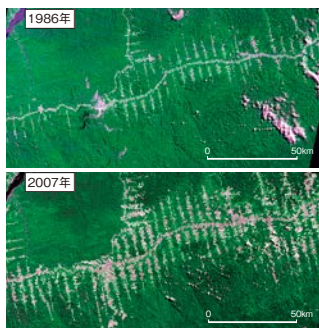
→Q：「2005年以降に森林伐採面積が減少しているのはなぜか」「2004年までの森林伐採の目的は何か」

※地図帳p.163の都道府県別統計を活用し、グラフ上の1995年の伐採面積の約3万km²は、関東地方や近畿地方とほぼ同面積であることに着目させ、伐採面積の広さに気づかせましょう。

◇**関連資料**：地図帳p.68 「⑥ブラジルのさとうきびと大豆の栽培」

→Q：「さとうきびと大豆の栽培が多いところと同ページの『⑨アマゾン盆地（ブラジル）の森林の減少』の『森林破壊の激しいところ』とを照合してみよう」
Q：「2000年以降、さとうきびや大豆の生産が増加しているのはなぜか」

以上のように教科書や地図帳の資料を中心に熱帯林の減少の状況と背景について思考活動をした後に、さとうきびや大豆などバイオ燃料の栽培とパルプの原料となるユーカリの植林によ



④アマゾン川流域で拡大する熱帯林の伐採（ブラジル）アマゾン川流域を横断する道路から外側に向かってのびる伐採のあととは、魚の骨のように見えることから「フィッシュボーン」とよばれます。

図3 『社会科 中学生の地理』 p.96 「②アマゾン川流域で拡大する熱帯林の伐採」

る新たな環境問題の発生について、授業者による解説で理解させます。

ポイント③



生徒の興味・関心を引き出す資料を中心資料として活用すること

その四 深い学びにするための資料

新学習指導要領では、単元によっては単元を貫く課題を設定し、追究して自分なりの答えを導き出す「深い学び」を実現することが求められています。例えば、ヨーロッパ州では「EUを離脱しようとする国が増えているのはなぜか」、南アメリカ州では「アマゾン川流域の熱帯林開発を今後どうするべきか」という課題が考えられます。これらの追究活動には、教科書・地図帳の資料を活用した単元を貫く思考活動の展開・構成、そして思考を深める資料と活動の工夫が必要です。「EU離脱」については支持・不支持のそれぞれの根拠となる資料、「アマゾン川流域開発」については、ブラジル政府、先住民、環境団体、農民、外国政府、外国企業、世界銀行などさまざまな立場の意見、根拠となる資料を示し、まさに多面的多角的に考察する場面を提供することが必要です^(注)。

ポイント④



深い学びにするためには、さまざまな立場からの資料を用意すること

このように、生徒に思考活動をうながすためには、「地理的な見方・考え方」を働かせる資料の読み取り、そのための発問および思考活動の流れとなる展開の構成を考えることが大切です。

(注) 〈参考論文〉 荒井正剛「『世界の諸地域』学習における価値認識に関わる学習指導について」東京学芸大学研究紀要 東京学芸大学学術情報委員会（2018年）